漢文プリント【A面】

本プリントは、東京堂書籍 発行の「古典A ④漢文 故事と寓話」に収録された「孟母断機」の訓読に倣って作成しました。

氏　名

孟母断機

■部は置き字

孟子之少也、
既学而帰。孟母方織。
問曰、「学何所至矣。」
孟子曰、「自若也。」
孟母以刀断其織。
孟子懼而問其故。
孟母曰、「子之廃学、
若吾断斯織也。
夫君子学以立名、
問則広知。
是以居則安寧、
動則遠害。
今而廃之、
是不免於厮役、
而無以離於禍患也。
何以異於織績而食、
中道廃而不為。
寧能衣其夫子、
而長不乏糧食哉。
女則廃其所食、
男則堕於脩徳、
不為窃盗、
則為虜役矣。」
孟子懼、旦夕勤学不息。
師事子思、
遂成天下之名儒。

《書き下し文》にしてみよう

漢文の訓読＝返り点の規則

中国の漢文を文法上違う日本語で読むために設けられたものが返り点です。日本語読みにする場合、主に原文の字順とは逆に下から上へ返って読むこと（返読）となるため「返り点」といわれています。

◎上から順に読んでいき、返り点にあたったらその規則に従う。

・レ点　符合レの下からすぐ前の語に戻る

・一二（上下）点　符合一を読んですぐ符合二の語に戻る

※基本この二つの規則しかありませんので確実に理解しておこう

書き下し文とは訓読文に付けられた読む順序を示す返り点や送り仮名に基づいて日本語の文にしたものです。漢文は古典扱いとなりますので、仮名は歴史的仮名遣いでの表記となります。

※書き下す場合には付属語（助詞・助動詞）にあたる漢字は仮名に直す慣わしとなっています。

例　不←ず、之←の

置き字とは漢文を訓読する際にその読みの対象から外される字のことです。もちろん書き下す際にも対象となりません。

『而』『於』『于』『乎』『矣』『焉』『兮』『也』など

※右の字が必ず置き字になるとは言えません。つまり読む場合もあります。その場合は漢字の右に平仮名で「也」などと表記されることがあります。

師事　問の - は「師事」という熟語であることを示している

漢文プリント【B面】

孟母断機

孟子之少也、
既学而帰。孟母方織。
問曰、「学何所至矣。」
孟子曰、「自若也。」
孟母以刀断其織。
孟子懼而問其故。
孟母曰、「子之廃学、
若吾断斯織也。
夫君子学以立名、
問則広知。
是以居則安寧、
動則遠害。
今而廃之、
是不免於厮役、
而無以離於禍患也。
何以異於織績而食、
中道廃而不為。
寧能衣其夫子、
而長不乏糧食哉。
女則廃其所食、
男則堕於脩徳、
不為窃盗、
則為虜役矣。」
孟子懼、旦夕勤学不息。
師事子思、
遂成天下之名儒。

孟母断機

孟子の少きとき、
既に学びて帰る。孟母方に織る。
問ひて曰く、「学何れの所にか至る」と。
孟子曰く、「自若たり」と。
孟母刀を以つて其の織を断つ。
孟子懼れて其の故を問ふ。
孟母曰く、「子の学を廃するは、
吾の斯の織を断つがごときなり。
夫れ君子は学びて以つて名を立て、
問はば則ち知を広む。
是を以つて居れば則ち寧に安んじ、
動けば則ち害に遠ざかる。
今にして之を廃するは、
是れ厮役より免れずして、
以つて禍患より離るる無きなり。
何を以つて織績して食するに、
中道にして廃して為さざるに異ならんや。
寧くんぞ能く其の夫子に衣せて、
長く糧食に乏しからざらしめんや。
女は則ち其の食する所を廃し、
男は則ち徳を脩むるを堕らば、
窃盗と為らずんば、
則ち虜役と為らん」と。
孟子懼れ、旦夕学に勤めて息まず。
子思に師事し、
遂に天下の名儒と成れり。

【Web漢文大系】の注釈から

孟子：前372?～前289。戦国時代の儒教の思想家。魯の鄒（今の山東省鄒城市）の人。名は軻、字は子輿。亜聖ともいわれる。性善説を主張した。
ウィキペディア【孟子】参照。
少：若い。
既：（勉強に）区切りをつけて。
方：「まさに」と読み、「ちょうどそのとき」と訳す。
織：機を織る。
学何所至：学問はどこまで進んだか。
何：「いずれに～ぞ」と読み、「どこまで～か」と訳す。
自若：もとのまま。少しの変化もないこと。
織：織っていた布。
断：断ち切る。
懼：驚き恐れる。
故：理由。
子：あなた。成人した男子に対する敬称。
廃：やめる。
断：断ち切る。
若：「～のごとし」と読み、「～のようだ」と訳す。比況を表す。
夫：「それ」と読み、「そもそも」と訳す。文頭におかれる。
君子：人の上に立つ者。
立名：名をあげる。評判になる。
問：（人に）問いかける。尋ねる。
広知：知識を広める。見識を広める。
是以：「ここをもって」と読み、「それだから」「こういうわけで」「このゆえに」「それゆえに」と訳す。「以是」は「これをもって」と読み、「この点から」「これにより」「これを用いて」と訳す。
居：仕官しておらず、家にいること。
安寧：心安らかなこと。
動：仕官して活躍すること。
害：災い。災難。障害。
之：学問を指す。
厮役：雑役。召使として雑用をさせられること。
禍患：災難。
何以異：どうして違いがありましょうか（いや、違いはない）。
何以：「なにをもって（か）～ん（や）」と読み、「どうして～（する）のか、いや～（し）ない」と訳す。反語形。
織績：織り績ぐ。織物を織る。
食：生計を立てる。
中道：途中。
廃：やめる。
寧：「いずくんぞ～ん（や）」と読み、「どうやって～するのか、いや～できない」と訳す。反語形。
其夫・子：自分の夫や子ども。
衣：衣服を着せる。動詞。
糧食：食べ物。
乏：欠乏する。ひもじい思いをする。
其所食：食べていくための仕事。
脩徳：学んで徳を身につける。学問をして人格を養う。
堕：怠る。なまける。
虜役：召使。使用人。
懼：驚き恐れる。
旦夕：朝となく夕となく。終日。
息：休む。
子思：春秋時代、魯の学者。姓は孔、名は伋。孔子の孫で、鯉の子。子思は字。曾子に学んだ。
ウィキペディア【子思】参照。
名儒：すぐれた儒学者。

漢文プリント【ワーク】

氏　名

孟母断機

孟子の少きとき、
既に学びて帰る。孟母方に織る。
問ひて曰く、「学何れの所にか至る」と。
孟子曰く、「自若たり」と。
孟母刀を以つて其の織を断つ。
[1]孟子懼れて其の故を問ふ。
孟母曰く、「子の学を廃するは、
吾の斯の織を断つがごときなり。
夫れ君子は学びて以つて名を立て、
問はば則ち知を広む。
是を以つて居れば則ち寧に安んじ、
動けば則ち害に遠ざかる。
今にして之を廃するは、
是れ厮役より免れずして、
以つて禍患より離るる無きなり。
何を以つて織績して食するに、
中道にして廃して為さざるに異ならんや。
寧くんぞ能く其の夫子に衣せて、
長く糧食に乏しからざらしめんや。
女は則ち其の食する所を廃し、
男は則ち徳を脩むるを堕らば、
窃盗と為らずんば、
則ち虜役と為らん」と。
[2]孟子懼れ、旦夕学に勤めて息まず。
子思に師事し、
遂に天下の名儒と成れり。

◇1 「学何れの所にか至る」（学何所至矣）
・誰の言った言葉か
・どんなこと(内容)を問うたのか

◇2 「自若たり」（自若也）
・誰の言った言葉か
・どういう意味か

◇3 「子の学を廃するは、～則ち虜役と為らん」（子之廃学～則為虜役矣）
・誰の言った言葉か
・この部分の内容を理解することが肝です

◇4 「孟子懼」について
○二段落と三段落の冒頭にある「孟子懼」。それぞれ何を懼れたのか
・〔二段落〕 [1]孟子懼れて
・〔三段落〕 [2]孟子懼れ

口語訳 〈manapedia〉より抜粋

孟子が若かった頃、学び終えて（実家に）帰ったところ、孟子の母親はちょうど機織りをしているところでした。（母親が孟子に）尋ねて言いました。
「学問はどこまで進みましたか。」と。
孟子は言いました。
「少しも変わりありません。（進捗がありません。）」と。
（それを聞いた）孟子の母親は、刀で（いままで織っていた）織物を切ってしまいました。
孟子は恐る恐るその理由を尋ねました。孟子の母親が言います。
「あなたが学問をやめてしまうことは、私がこの織物を切ってしまうようなものです。そもそも君子というのは、学問で名を立て、（わからないことは）尋ねて見識を広めます。こうすることで、仕官せずに家にいるときは安らかであり、仕官して活動するときには（様々な）障害を遠ざけるのです。いまの状態（学問を修めていない状態）で学ぶことをやめるということは、使用人となることを免れず、災難から離れることもありません。布を織って生計を立てているのに、途中で（織ることを）やめてしまい布を完成させないのとどうして異なりましょうか、いや、異なりません。（その状態だと）どうして夫や子に服を着せ、いつまでも食料に困らせない（ひもじくさせない）ことができましょうか、いやできません。女性が（機織りによって）生計を立てることをやめ、男性が徳を修めることを怠れば、窃盗をしなければ、使用人となってしまうでしょう。」と。
孟子は（母の怒りに）恐れおののいて、朝も晩も学問に打ち込み休むことはありませんでした。子思先生に師事し、ついには天下に名高い儒者となったのでした。

【孟母断機に出てくる修辞法】

反語　あえて、本当に表したいこととは反対のことを述べる修辞法

寧（寧んぞ）　読み方：いずくんぞ～（ン・ヤ・か）
訳〔意〕「どうして～することがあろうか、いや、ない」
「寧んぞ」の他に「安んぞ」や「焉んぞ」なども同じく「いずくんぞ」と読まれる。

何以（何を以て）　読み方：なにヲもつテ～ン(ヤ)
訳〔意〕「どうやって～か、いや～ない」

もうしのわかきとき、
すでにまなびてかえるに、もうぼまさにおる。
といていわく、がくいずれのところにかいたる、と。
もうしいわく、じじゃくたり、と。
もうぼとうをもってそのしょくをたつ。
もうしおそれてそのゆえをとう。
もうぼいわく、しのがくをはいするは、
われのこのしょくをたつがごときなり。
それくんしはまなびてもってなをたて、
とはばすなわちちをひろむ。
ここをもっておらばすなわちねいにやすんじ、
うごけばすなわちがいにとおざかる。
いまにしてこれをはいするは、
これしえきよりまぬがれずして、
もってかかんよりはなるるなきなり。
なにをもってしょくせきしてしょくするに、
ちゅうどうにしてはいしてなさざるにことならんや。
いずくんぞよくそのふしにきせて、
ながくりょうしょくにとぼしからざらしめんや。
おんなはすなわちそのしょくするところをはいし、
おとこはすなわちとくをおさむるをおこたらば、
せっとうとならずんば、
すなわちりょえきとならん、と。
もうしおそれ、たんせきがくにつとめてやまず。
ししにしじし、
ついにてんかのめいじゅとなれり。

孟子が若かった頃、学び終えて（実家に）帰ったところ、孟子の母親はちょうど機織りをしているところでした。（母親が孟子に）尋ねて言いました。
「学問はどこまで進みましたか。」と。
孟子は言いました。
「少しも変わりありません。（進捗がありません。）」と。
（それを聞いた）孟子の母親は、刀で（いままで織っていた）織物を切ってしまいました。孟子は恐る恐るその理由を尋ねました。孟子の母親が言います。
「あなたが学問をやめてしまうことは、私がこの織物を切ってしまうようなものです。そもそも君子というのは、学問で名を立て、（わからないことは）尋ねて見識を広めます。こうすることで、仕官せずに家にいるときは安らかであり、仕官して活動するときには（様々な）障害を遠ざけるのです。いまの状態（学問を修めていない状態）で学ぶことをやめるということは、使用人となることを免れず、災難から離れることもありません。布を織って生計を立てているのに、途中で（織ることを）やめてしまい布を完成させないのとどうして異なりましょうか、いや、異なりません。（その状態だと）どうして夫や子に服を着せ、いつまでも食料に困らせない（ひもじくさせない）ことができましょうか、いやできません。女性が（機織りによって）生計を立てることをやめ、男性が徳を修めることを怠れば、窃盗をしなければ、使用人となってしまうでしょう。」と。
孟子は（母の怒りに）恐れおののいて、朝も晩も学問に打ち込み休むことはありませんでした。子思先生に師事し、ついには天下に名高い儒者となったのでした。